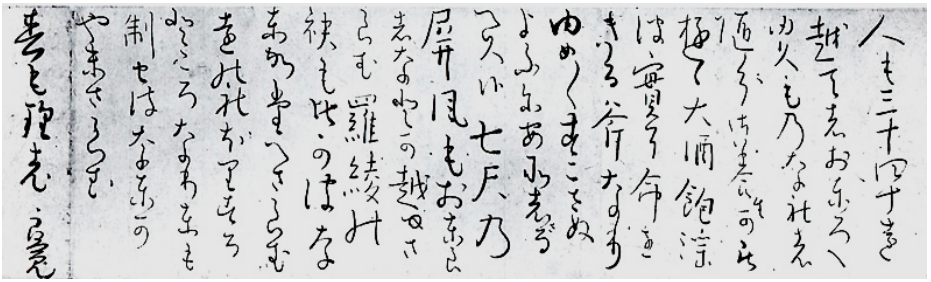
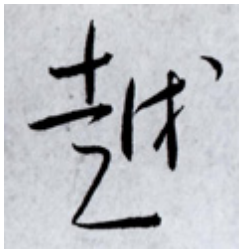
良寛の手紙

良寛の手紙は２６０通余り残されている。その三分の二が、贈り物の礼状である。贈り主は32家にもなる。ふつう手紙は日常の実用の書であるが、良寛の手紙は、形式ばらず、のびのびと書かれ、芸術作品のように美しい。宛先は67名以上。肉親宛を除けば、その多くが、名主などの資産家や、医師や僧尼などの知識階級宛である。

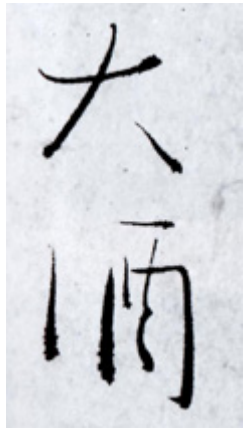


良寛から、すもり宛手紙　40歳代前半頃の手紙か。巣守（すもり）は由之（よしゆき）の別号。15.3×52.2㎝　良寛記念館蔵

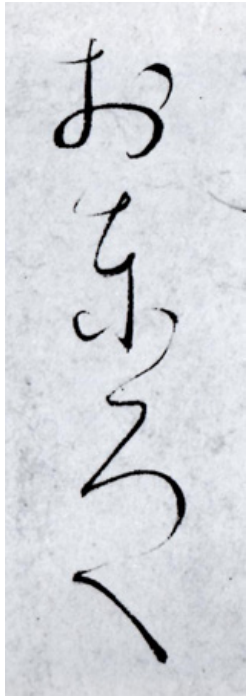
人も三十四十を
越ては　おとろへ
ゆくものなれば
随分御養生可被
遊候　大酒　飽淫
は實に命を
きる斧なり
ゆめゆめすごさぬ
よふにあそばさる
べく候　七尺の
屏風も　おどら
ばなどか越ざ
らむ　羅綾の
袂も　ひかばな
どかたへざらむ
をのれほりする
ところなりとも
制せば　などか
やまざらむ
すもり老　良寛



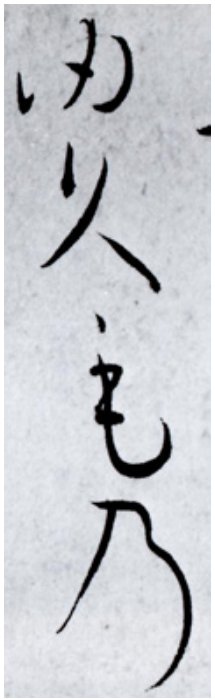
越



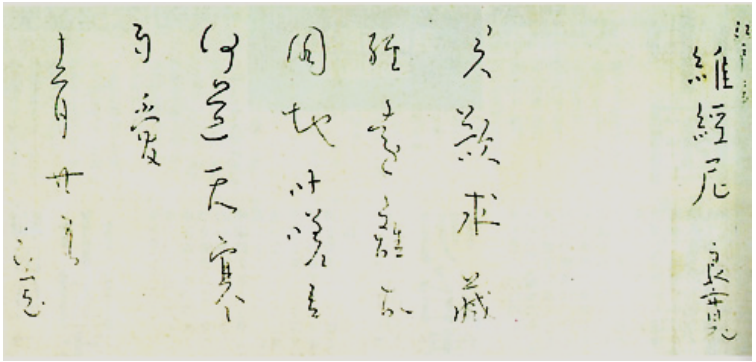
大酒



お東（とう）ろへ



由久毛乃（ゆくもの）



維経尼宛手紙　良寛記念館蔵　文政元年（１８１８）16×36㎝

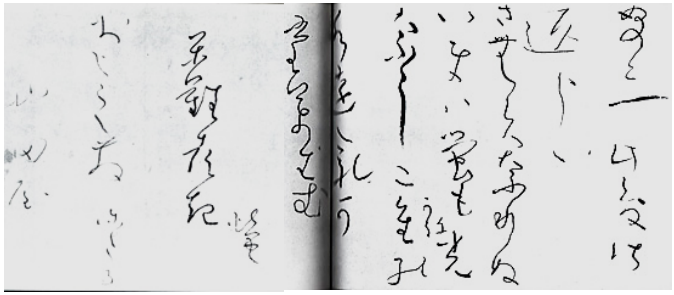
江戸ニて

維經尼（いきょうに）　良寛

君は蔵経（ぞうきょう）を求めんと欲して
遠く故園（こえん）の地を離る
吁嗟（ああ）　吾れ何をか道（い）はん
天寒（てんさむ）し　自愛（じあい）せよ

十二月廿五日　良寛

維馨尼（経）は良寛がひそかに思い続けた、永遠の女性といわれている。彼女は、良寛の親友の姪で、良寛より7歳下。幼いころから親しかった。5通の手紙が残っている。彼女が58歳で亡くなった時、「かくばかり　恋しき人の　世の中に　二人ともあらじ　とくにも死なん」と詠み、故郷を離れ、3年近く、東北の旅に出た。



およし宛手紙　15×約36㎝

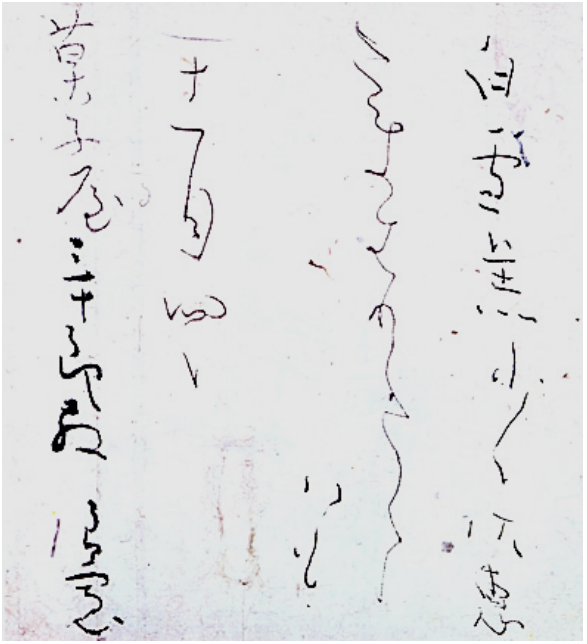
ぬのこ一　此度御
返申候
さむくなりぬ
いまハ蛍も光
なし　こ金（がね）の
水をたれか
たまはむ

蛍

閑難都起（かなつき）
およし散（さ）　ほたる

山田屋

およしは、山田杜（こう）皐の妻。気さくでひようきんな女性で、良寛とは大変仲が良かった。



良寛書、**菓子屋三十郎宛手紙**　15.8×15.0㎝

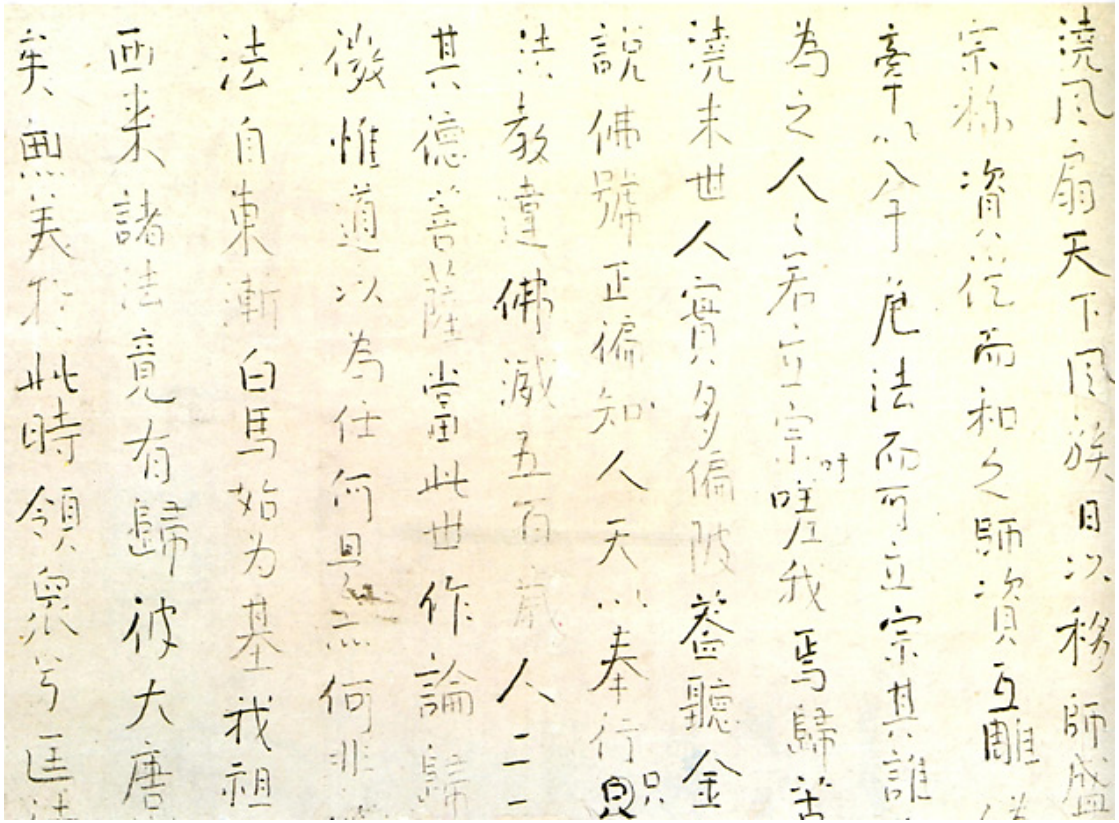
白雪羔少々御恵
多ま者利多く候
以上
十一月四日
菓子屋三十郎殿　良寛

白雪羔は高級な干菓子で、良寛が自分が食べるために無心したのではないだろう。

平安古筆にひけをとらない独創的な造形美といわれる。純粋な「書の美」の典型である。

変化とハーモニー、素直な線質、のびのびとして大らかな精神、線に込められた豊かな人間性など。

一行目は放ち書き。二行目は連綿。三行目のまとめ方。四行目の変化と軽やかさ。五行目の濃墨のアクセント、などなど。



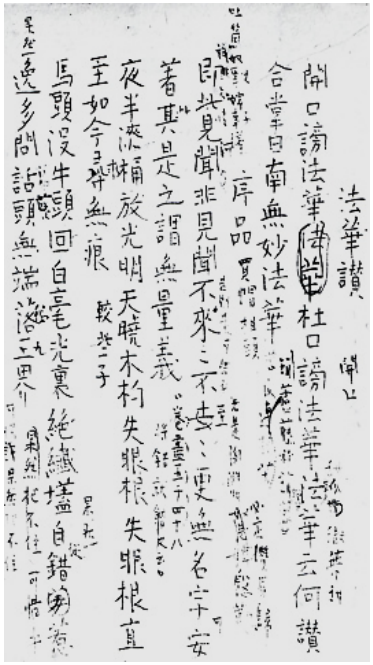
良寛書**「唱導詞」**部分　22×30.5㎝　もとはこの倍あったが、切断されている。　良寛の里美術館蔵

良寛は、ただ、温和で純朴なだけの人間ではなかった。

２６０字の五言詩「僧伽」（次の頁）は良寛の墓碑の側面に刻まれている。上の「唱導詞」は、「人々を正しい方向に導くために作った詩」という意味である。この二つの詩は、当時の堕落した仏教界への激しい憤りを表している。

「唱導詞」

「本来、仏道は一つであるはずなのに、中国の宋の時代の末期からいくつもの宗派に分裂し、その支流の宗派が日本にも入ってきて、日本の仏教界は混乱状態になった。この時、道元禅師が現れ、その択法眼（仏法の良し悪しを見抜く見識）によって、正しい仏法が盛んになった。ところが、道元禅師が亡くなって何百年か経った今、俗悪な僧たちがはびこり、学徳高い僧は埋もれてしまっている。香り高い美しい歌が消え、卑俗な歌がこの世に充満している。ああ悲しいかな、私はこんな時代にめぐり合ってしまった。今まさに崩壊しようとしている仏道という大きな家屋を、私というたった一本の柱で支えることは不可能だ。こんなことを考えると一睡もできず、寝返りを打ちながらこの詩を作った」（杉本武之氏の要約より）

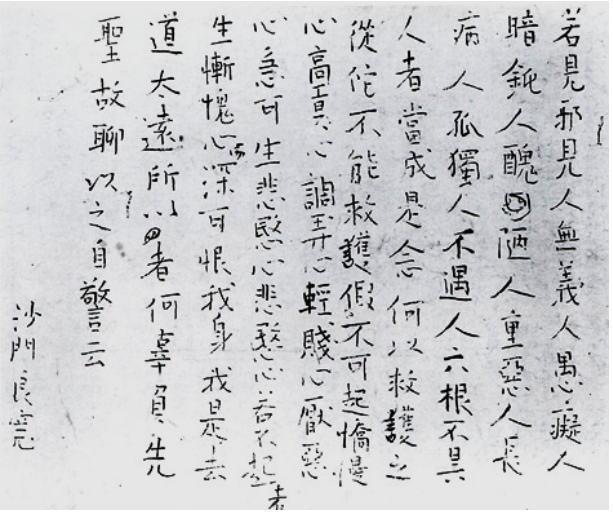


良寛書「**法華賛**」部分 23.8×32.4 ㎝
良寛独自の法華観が書かれている。

『法華経』は、道元も重要視していた経典。そこには、様々な菩薩が出てくる。良寛は特に「常不軽菩薩品第二十」に出てくる、常不軽菩薩を尊敬した。

比丘はただ　万事はいらず　常不軽
菩薩の行ぞ　殊勝なりける　良寛

（僧に必要なものは、あのすばらしい常不軽菩薩の行だけで、他には何もいらない）



良寛書「**自ら警むる文**」六曲一双屏風のうち

常不軽菩薩とは、サンスクリット語で、「常に軽蔑しても人を軽んぜず」の意。常不軽は蔑称。常不軽菩薩は、常に不軽の教えを述べて歩いた。

「僧伽」（僧侶という意味）

「俗世間から逃れて仏門に入り、托鉢修行をして暮らしていこうと考えて仏道に入ったのなら、次に述べることを深く考え反省してほしい。私が見るところ、今の僧侶は昼も夜もやたらに俗界に出て大げさに騒ぎ回って活動している。それもただ、うまい物を食べたり、いい衣服を着たいためである。一生、そうやって時間を浪費しているのだ。

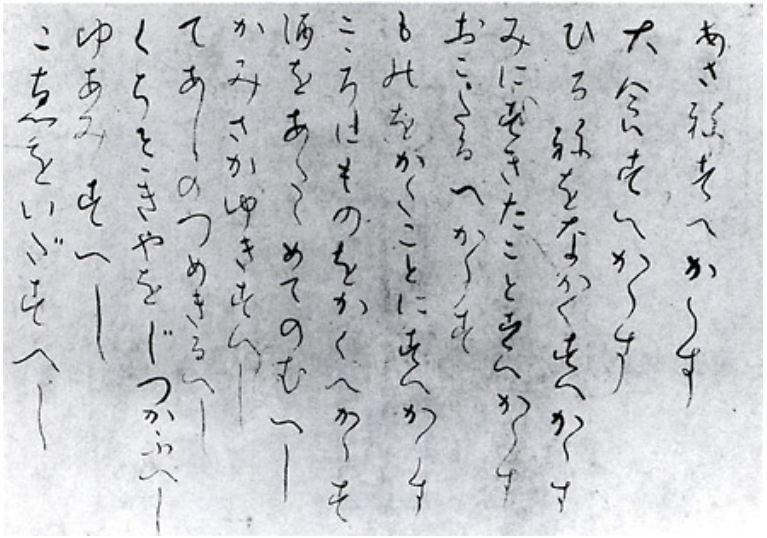
在家の人が道義心がないのは、まあ許せる。しかし、出家の僧のくせに道徳心がないのは、とても許すことはできない。この世の執着を断つために髪を剃り、世俗とのかかわりを捨てるために僧衣を着ているのだ。父母妻子の恩愛を捨てて仏門に入ったのは、決していいかげんな行為ではなかったはずだ。

ああ、この広い世間を見ると、男も女もみんなきちんと仕事をしている。もし女が布を織ってくれなければ、着る物がなくなる。もし男が田畑を耕してくれなければ、食べる物がなくなる。ところが、今、僧たちは、仏の弟子と称する身なのに、人も救えず、自らも悟ることがない。ただ檀家から受け取るお布施をむだ使いし、仏に仕えることを忘れている。寄り集まっては無駄話をし、自分を高めようと努力しないで一日一日を無駄に過ごしている。外に出ると、いかにも悟りきった高僧のようなふりをして、農家のおばあさんたちをだましている。そんなありさまなのに、自分はすぐれた僧だと威張っている。ああ、いつになったら目が覚めるのだろう。　たとえ子連れの虎の群れの中に入るような危険なことをしようとも、名誉と利益を求めるということだけは絶対にしてはいけない。名利を求める心が少しでも生じると、それを流し去るためには大海の水を全部用いてもまだ足りないのだ。思い出してほしい、昔あなたが出家した日のことを。それはただ衣食を得るためではなかったはずだ。父母はあなたの頭を撫で、兄弟は遠くまで見送ってくれた。その日を限りに、親子の関係も絶え果て、便りもなくなった。しかし、両親や兄弟は日夜神仏に祈って、あなたの求道心が堅固なものになっていくことを願っているのだ。

それなのに、今のあなたのような状態では、将来非常に恐ろしいことになるだろう。よい機会は常に失われやすいし、正しい仏法にもなかなか巡り合えないものだ。心を入れかえて正しい道を歩みなさい。あとで後悔してあわてふためかないようにしなさい。私がこうやって口を酸っぱくして説くのは、けっして好き好んでしているのではない。

今からじっくり考えて、あなたの生き方を改めなさい。若い僧たちよ、しっかり頑張りなさい。正しい修行は苦しいものだ。その苦しさを恐れてはいけません」（杉本武之氏の現代語訳より）

良寛の戒語（かいご）は、18種類残っているらしい。戒語は良寛の思想のエッセンスだといわれる。

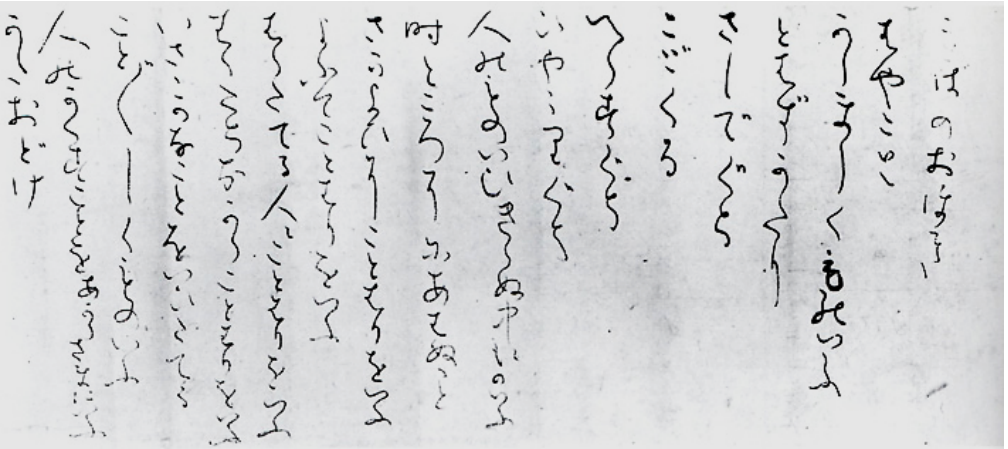


良寛書「戒語」　良寛の里美術館蔵

戒語

あさねすべからず
大食すべからず
ひるねをながくすべからず
みにすぎたことすべからず
おこたるべからず
ものをかたことにすべからず
こころにものをかくべからず
酒をあたゝめてのむべし
かみさかゆきすべし
てあしのつめきるべし
くちそゝぎやをじつかふべし
ゆあみすべし
こゑをいだすべし

朝寝ぼうをしないように。
食べ過ぎないように。
昼寝を長くしないように。
身分不相応なことをしないように。
なまけないように。
ものをいいかげんにしないように。
ものごとを気にしすぎないように。
酒はあたためてのんだ方がよい。
ちょんまげのさかやきはきちんとすっておいた方がよい。
手足のつめを切りなさい。
口をすすぎ、ようじを使うようにしなさい。
入浴をするようにしなさい。
声を出すようにしなさい。



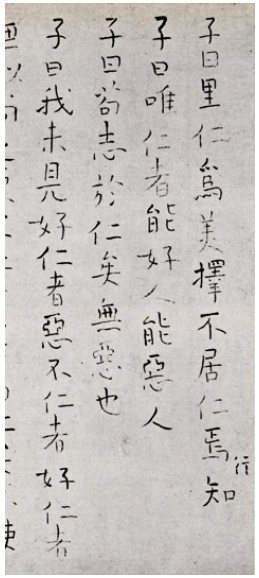
良寛書「戒語」部分　この戒語には、69カ条ある。心のこもった筆跡である。

ことばのおほき
はやこと
かしましくものいふ
とはずがたり
さしでぐち
こどくる
へらずぐち
ひやうりぐち
人のものいひきらぬ中ニものいふ
時ところにあはぬこと
さかよひにことはりをいふ
よふてことはりをいふ
はらたてる人ニことはりをいふ
はらたちながらことはりをいふ
いさゝかなことをいひたてる
ことごとしくものいふ
人のかくすことをあからさまにいふ
かたおどけ　図版はここまで

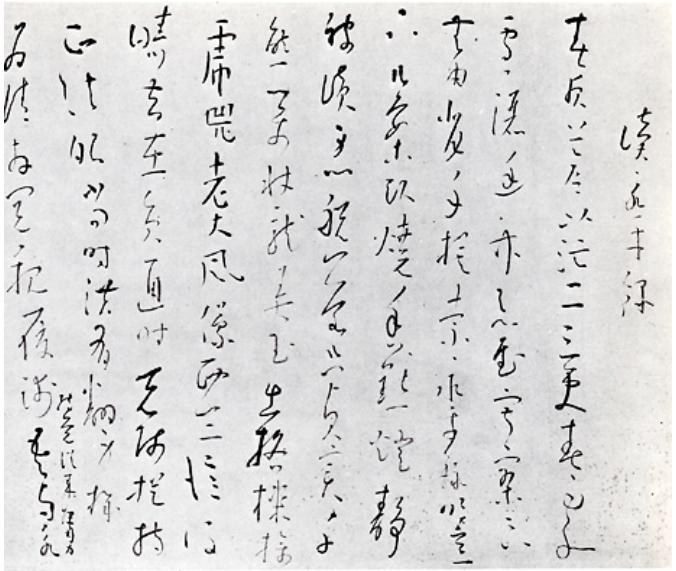
良寛は説教が嫌いだったようだが、晩年には、「戒語」「愛語」をたくさん書いている。弟子の貞心尼には九十ヵ条の戒語を与えている。

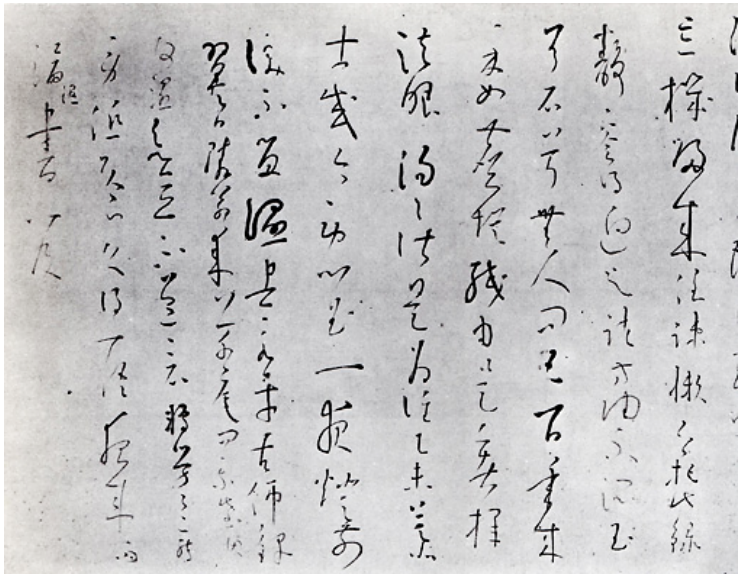
ことばの多き　口のはやき　さしで口　自慢ばなし　よく心得ぬことを人に教ふる　あの人に言ひてよきことを、この人に言ふ　人のかくすことを、あからさまに言ふ　学者くさき話　さとりくさき話　親切らしく物言ふ　みだりに約束する　人の物言ひきらぬうちに物言ふ　人のけしきを見ずして物言ふ　子どもをたらかし、すかして興ずる　愚かなる人をあなどる　憎き心を持ちて人を叱る　すべて言葉をしみじみ言ふべし

良寛は、知ったかぶりをしないこと、自分の言葉になりきるまで人前で言葉を使ってはいけない、と戒めた。「良寛は、空疎な言葉を使わないように常に気をつけていた。」（杉本武之著『慈愛の人・良寛』より）



良寛書「論語抄」部分　木村家蔵





良寛書「讀永平録」部分　七言古詩　　これには別バージョンのものもある。

道元の『正法眼蔵』は良寛のバイブルだったが、『法華経』や『荘子』や『論語』からも大きな影響を受けたようである。

良寛は、「妍蚩に心を労することなかれ。書自ら成らん」と言っている。「妍蚩」とは美醜のこと。上図の「論語抄」は、そのような心で書かれたものと思われる。

上図の『永平録』とは『正法眼蔵』のこと。

「永平録を読む」現代語訳（杉本武之氏による）

春の夜が更け、あたりの闇も深まった。雪交じりの春雨が庭の竹に降り注いでいる。寂しい。しかし、この寂しさを慰めるすべはない。暗中を手探りして『永平録』を取り出す。机上に置き、香を焼き、灯火を点け、静かに読み始める。一言一句、すべて珠玉の文字である。「身心脱落」。これこそ永遠の真理だと説かれている。

ああ、思い出す。昔、玉島の円通寺で修行していた時、今は亡き国仙和尚から『正法眼蔵』の教えを受けた、あの日の夜のことを。師の教えを聞いて、私の心は一変した。すぐに願い出て、『正法眼蔵』を見せてもらった。そして、そこに説かれている教えを実践してみた。

その結果、今までは自己中心で自分の救済のことばかり考えていたことが分かり、その間違いに気付いた。これを機に、師のもとを離れ、諸方を遍歴することにした。

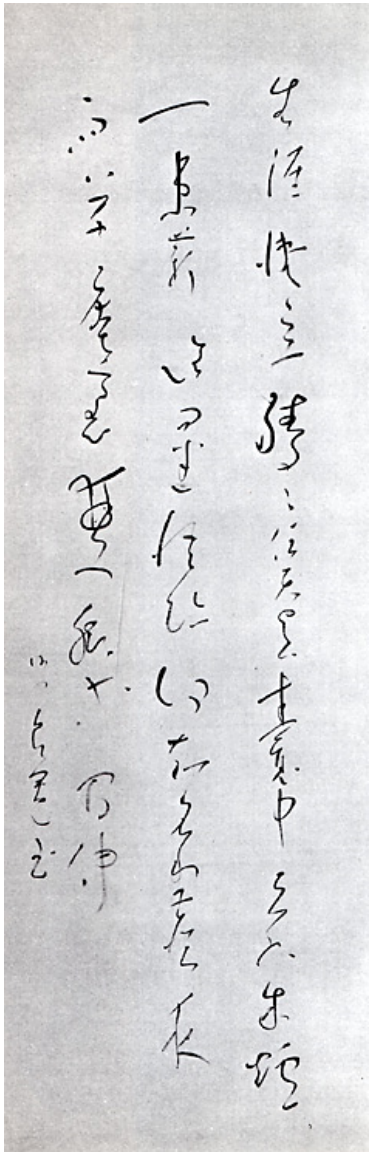
私と道元禅師との間には深い縁があったにちがいない。いたるところで『正法眼蔵』の教えに出会った。それから後、どれほどの歳月が流れ過ぎたか分からない。諸国行脚を止めて、故郷に帰り、気ままな暮らしに入った。

今、この道元禅師の語録を手にして、心静かに読んでみると、他のいろいろな教えとは大いに趣を異にしていることがよく分かる。『正法眼蔵』がすぐれた玉なのか、つまらぬ石なのかということすら誰も考えようとしない。この尊い書物が五百年この方、塵やほこりに埋もれて見向きもされなかったのは、ただただ人々に正しい仏法を選びぬく眼力がなかったことによるのだ。

世の中というものはこうしたものなのだ。道元禅師の昔を偲び、今の世のありさまを嘆いていると、心のすみずみまでが苦しく、悩み疲れてしまった。この夜、灯の前で涙が流れ止まず、道元禅師の本をすっかり濡らしてしまった。

翌日、近くの老人が草庵にやってきて、「この本はどうして湿っているのかね」と聞いた。わけを話そうと思ったが、うまく答えることができない。胸がいよいよ切なくなる。

心がますます苦しくなる。しかし、どうしても言えない。頭をたれて、しばらくじっと考えているうちに、よい言葉を思いついた。「じつはね、昨夜からの雨で雨漏りして、本箱が濡れたためだよ」



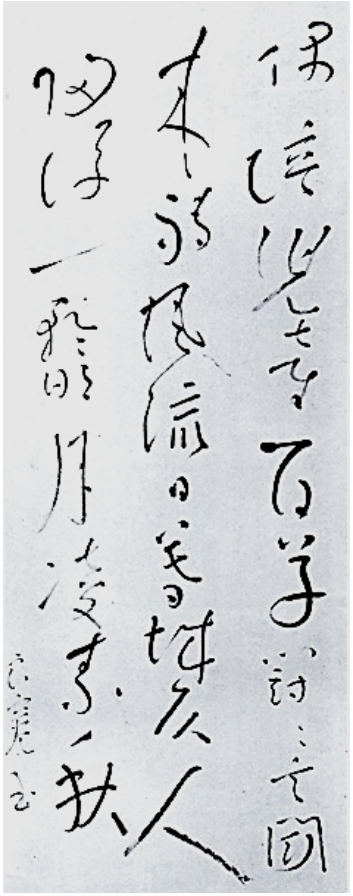
良寛書「生涯懶立身」五言律詩
絹本 108×35.3 ㎝　三幅対のその三。
木村家蔵。

生涯懶立（身）　朦々任天眞　嚢中三升米　爐（邊）一束薪　誰問迷悟跡　何知名利塵　夜雨草庵裏　雙脚等閒伸

沙門良寛書

生まれてこのかた、世間でいう立派な人になることには気がすすまず、自然のままに、のほほんと過ごしている。頭陀袋に三升の米と、炉辺には薪が一束あるのみだ。それ以外草庵には何もないが、これで暮らしは充分だ。誰が迷いだの悟りだのにとらわれた古人の跡を求めようか。また、どうして名誉や利益といったこの世の煩わしさに関わろうか。夜になって雨になれば、静かな雨音につつまれた庵の中で、両足を思いのままゆったりと伸ばして過ごすばかりだ。（杉本武之氏の現代語訳より）

良寛は清貧の生き方の中で詩歌や書を作り出した。寂しい心の歌であり書である。良寛は印を使わない。



良寛書「漢詩」七絶　134×49.2 ㎝

偶陪児童百草闘　闘去闘來轉風流　日暮城頭人歸後　一輪名月凌素秋　良寛書

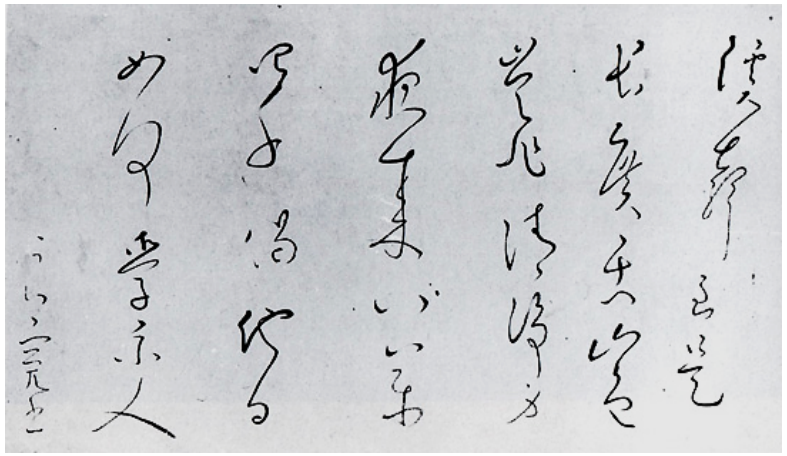
子ども達が草争いをしているところへ加わった。とても楽しくみやびやかである。日が暮れ、街かどから人もいなくなってしまった。見れば、清らかな月が秋空にかかっている。

良寛が愛読した中国の古典は、『詩経』、『離騒』、『文選』の中の「古詩十九首」など。詩人では、陶淵明、寒山、王維、李白、杜甫、白居易、蘇東坡らを崇拝した。特に、『寒山詩集』、『法華経』から強く影響を受けたという

誰謂我詩詩　誰か我が詩を詩と謂わん
我詩是非詩　我が詩は是れ詩に非ず
知我詩非詩　我が詩の詩に非ざるを知りて
始可与言詩　始めて与に詩を言う可し

良寛の漢詩は、唐代に確立した近体詩や古詩に準拠していない。「心中のものをうつす」詩を理想とした良寛は、近体詩を捨てることで、それを実現したと思われる。

良寛詩は、哲学的で清らか、豊かな想像力、冷徹な観察力、宗教性、痛烈な社会批判が特徴であり、当時の詩の常識を超えていた。

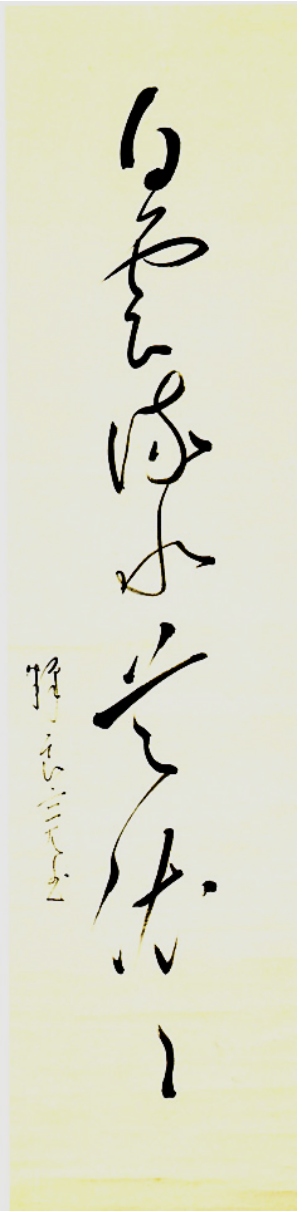


良寛書「蘇東坡の詩」七絶　良寛の里美術館蔵

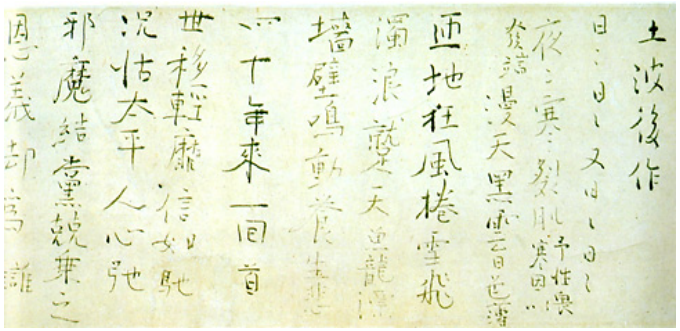
溪聲良是長廣舌
山色豈非清浄身
夜來八萬四千偈
他日如何擧示人
良寛書

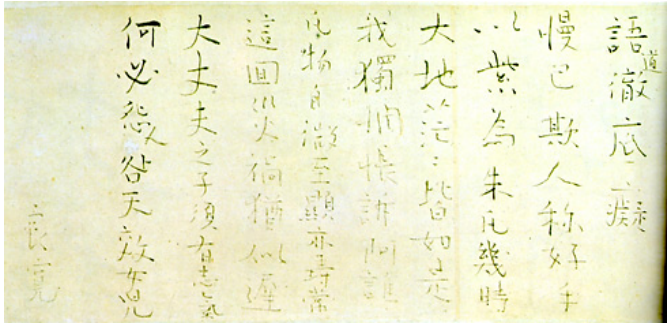
谷川の水の音が絶え間なく聞こえる。山の色は、ほんとうに清らかで美しい。昨夜来多くの仏徳をたたえる言葉をとなえているが、これをどうしたら人に示すことができるだろうか。

白雲流水共に依々たり　　釋良寛書　※「依々たり」は、ありのままの姿のこと。



良寛書　最晩年の作 135×34.5 ㎝

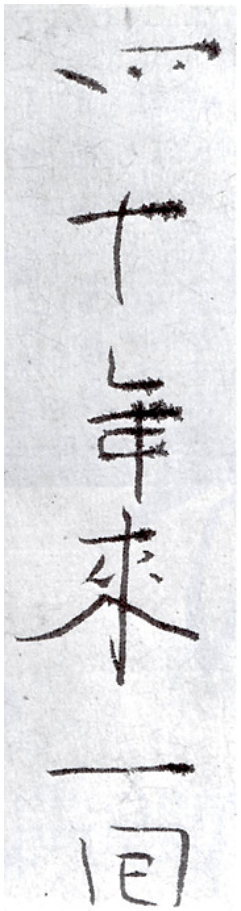




良寛書「土波後作」文政 11 年（1828 年）75×16.5 ㎝

土波後作

日々　日々　又日々
日々夜々　寒さ肌を裂く
予が性　寒さを畏る
因って以て発端とす
漫天の黒雲　日色薄く
匝地の狂風　雪を捲いて飛ぶ
濁浪は天を蹴って魚龍　漂ひ
墻壁は鳴動して蒼生　悲しむ
四十年来　一たび首を回らせば
世は軽靡に移ること信に馳するが如し
況や太平を估んで人心　弛み
邪魔　党を結んで競うて之に乗ず
恩義　却って讎と為し
忠貞　更に知る無し
利を論じて毫末を争い
語道も徹底の癡のみ
己を慢り人を欺くを好手と称し
紫を以て朱と為すこと　凡そ幾時ぞ
大地茫々　皆是の如し
我独り惆悵　阿誰にか訴へん
凡そ物　微より顕に至るは亦尋常
這回の災禍　猶遅きに似たり
大丈夫の子　須く志気あるべし
何ぞ必ずしも人を怨み天を咎めて女児
に效はむや　良寛



部分

文政11年11月12日朝おこった三条大地震は、全壊９８０８戸、焼失１２０４戸、死者１４４３名、負傷者１７４９名といわれる。

また、この年は凶作で、米の値段が高騰し、民衆の暮らしは、困窮を極めた。

地震の後、良寛は、山田杜皐宛の手紙に、有名な言葉、

「しかし災難にあふ時節には災難に逢ふがよく候。死ぬる時節には死ぬがよく候。これはこれ災難をのがるゝ妙法にて候。」

を書いている。この一節は、良寛の自然順応の思想を最もよく表しているといわれる。「生死一如」の世界である。

「土波」は地震のこと。この詩で良寛は、世間に対して、はげしくしかりつけている。

この地震は、四十年来、世の風潮が軽はずみで、人心はゆるみ、傲慢だから起きたので、一つの天罰だと戒めている。

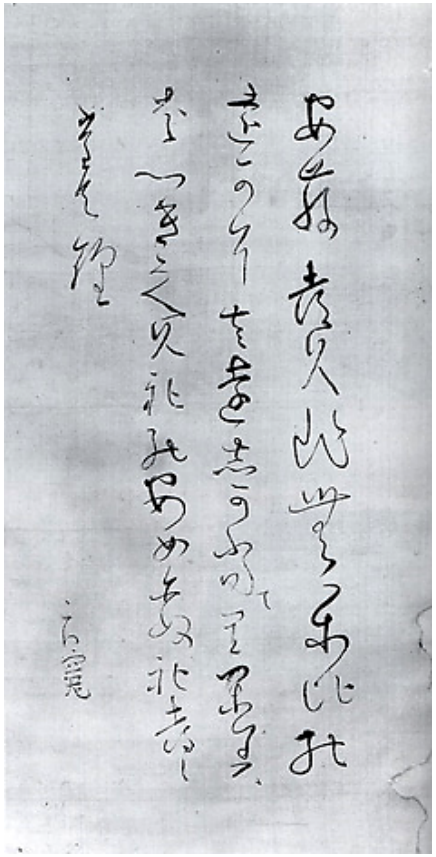
「突然に災害にあって死んだ方が、生き永らえて不幸にあえぐより楽である。ほんとうの災難はむしろ、災難の後の立ち上りにあるのだ・・・」

これが良寛の人生観である。

良寛書　双幅　各 127.5×38.5 cm

一二三
　釋良寛書
いろは
　沙門良寛書

ある時、村人が良寛に「良寛さまの書は何が書いてあるか読めないで困る。我々にもわかる字を書いて下され」と言ったので、それでは、と書き与えたものといわれている。



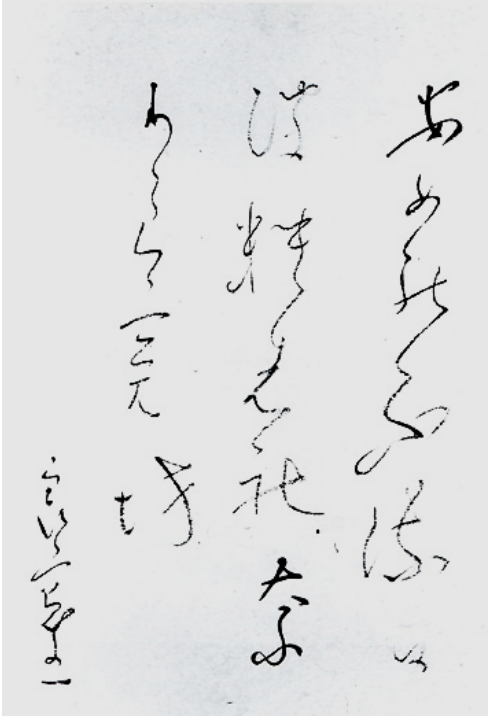
良寛書「旋頭歌」71.4×36.0 cm

安散都久非　無閑比能
遠可耳　左遠志可當天里　閑美
奈川幾之久禮能安女爾奴禮都々
堂天理　良寛

朝づく日　向ひの岡に　小牡鹿
たてり　神無月　時雨の雨に
濡れつつ立てり

良寛は『万葉集』の影響で、旋頭歌を詠むようになったという。

旋頭歌は、五七七を2回繰り返す奈良時代の和歌の一形式。



木村家蔵

良寛書「俳句」

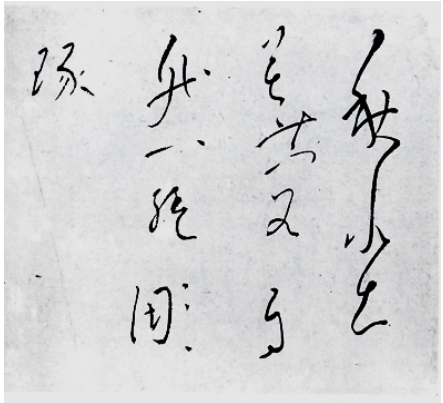
安女能不流日
波　鞅者禮奈
利　良寛坊

良寛書
雨の降る日は
あはれなり
良寛坊

雨宿りした家で、書いてくれとせがまれて、しかたなく書いた句という。

良寛が本格的に『万葉集』を学んだのは、60歳前後からだといわれている。以後、素朴で力強い歌を詠んでいった。

良寛は、万葉集も論語もほとんど暗唱していたという。



木村家蔵

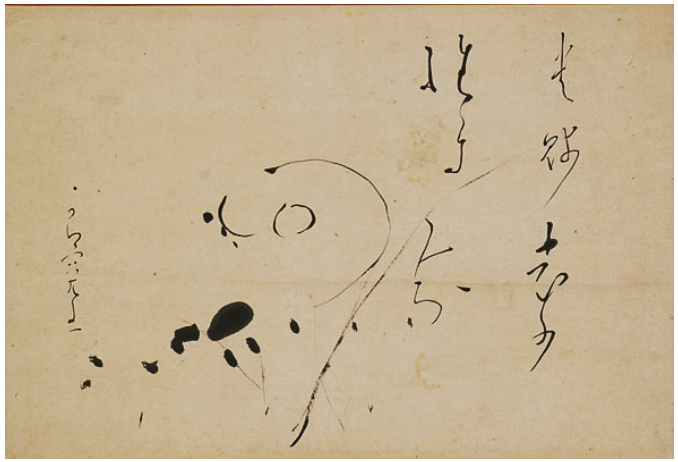
良寛書「五言二句」

秋水出
芙蓉　自
然絶彫
琢
秋水芙蓉を出だし
自然彫琢を絶す

ここでいう「芙蓉」は、蓮の花のことらしい。リズミカルな書。線と点のコントラスト。流麗。

「師は声が明るくのびやかであった。読経の声が心の耳にひびいた。その声を聞いた者は、おのずから信じる心がおこった。」（『良寛禅師奇話』第6話より）

「師に書を求めると、練習して上手になってから後に書こうという。その時によって興に乗ると、数幅を書くこともある。あえて筆や硯、紙や墨等の品質は問わない。自分でよんだ詩歌を暗記していて書くのである。その為に脱字をしたりまた大同小異があって、詩や歌の語句が一定しない場合がある。」（『良寛禅師奇話』第12話より）



良寛筆「**自画歌賛　髑髏図**」28.5×41.9㎝　東京国立博物館蔵

貴賤老少
惟自知
良寛書

貴賤老少
惟自ら知れ

乙子時代（60代）の作品という。ふっくらとした、あたたかみのある書。

髑髏の絵はよく分からない。

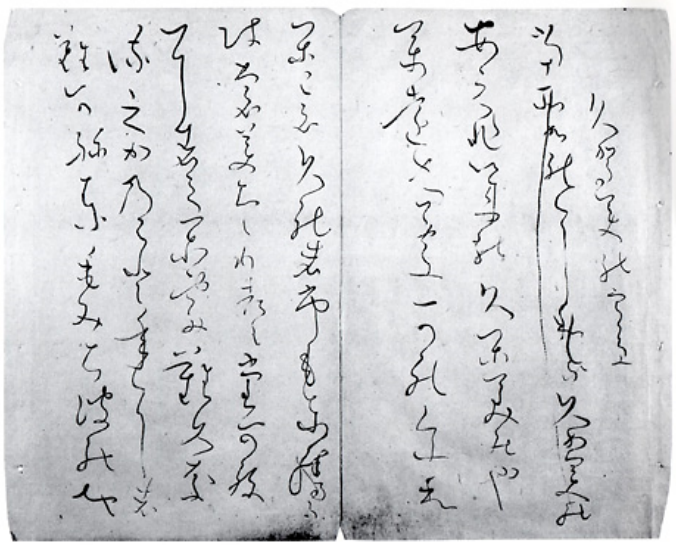
良寛歌賛　亀田鵬斎筆　山水図 92×28㎝

沙門良寛書
也萬散東者
宇羅左悲之久所
難利耳氣留　幾々乃
己數弊能　知利遊久見禮者

山里はうらさびしくぞなりにける
木々の梢の散りゆく見れば

「師は平生、喜怒の色を見せず、早口で話すのをきかない。その飲み食い、動作はしずかで、愚か者のようであった。」（『良寛禅師奇話』第18話より）

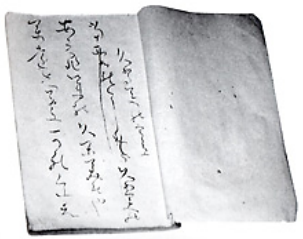
「師に色紙や短冊を出して書を求める人があれば、詩や歌を気ままに書いた。字の行や書の定法などはない。・・・」（『良寛禅師奇話』第25話より）



良寛書「**和歌集**」　晩年の作と思われる。26.7×16.6㎝　1帖

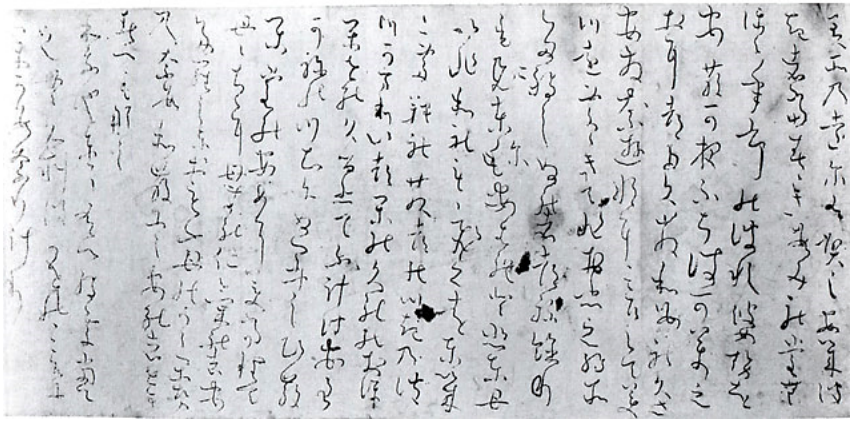
久駕美能宇多
當所加禮耳　和我久加美能
安之非幾能　久閑美能也
萬遠　當處可禮爾　和
閑己衣久禮者　布毛東（騰）而
波　裳美知々利都々　堂可禮
耳者　之閑處難久奈
流　之加乃己登　年耳者
難可禮東　毛美知波能　地

くがみのうた
あしひきの　国上の山を　たそがれに
わが越えくれば　ふもとには　もみち
散りつつ　たかねには　鹿ぞなくなる
鹿のごと　音にはなかねど　もみち葉の
ち（りゆく見れば　こころかなしも）



良寛の歌稿。全生涯の歌を収めている。朱筆で推敲もしている。歌集でも出版するつもりであったのか。

伸び伸びとした、変化のある線。



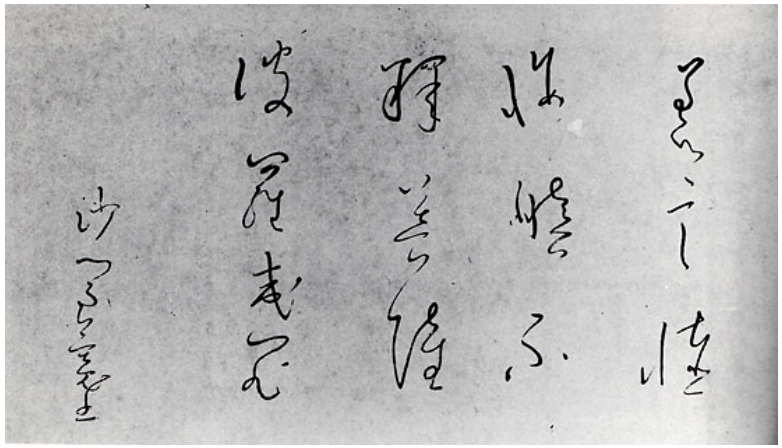
良寛書「和歌」長歌と反歌　文政13年〈1830年〉5月　木村家蔵

み園生に　植ゑし秋萩　はたすすき　菫
蒲公英　合歓のはな　芭蕉朝顔　藤袴　紫苑
露草　忘れ草　朝な夕なに　心して　水を注
ぎて　日覆ひして　育てしぬれば　常よりも
殊にあはれと人も言ひ　吾れも思ひしを　時
こそあれ　五月の月の二十日まり　五日の暮
れの　大風の　狂ひて吹けば　あらがねの
土にぬへ伏し　久方の　雨にみだりて
百々千々に　もまれにければ　惜しと　思ふ
ものから　風のなす　業にしあれば　せむ術
もなし

わが宿に植ゑて育てし百草は
風の心に任すなりけり

あまり連綿せず単体で書かれている。亡くなる半年ほど前の作品。**「生死一如」の世界。**

「私は質問した。歌を学ぶには何の書を読むべきだろうか。師が言うには、万葉集を読むべきである、と。私は万葉はわれらには理解しがたいという。師がいうにはわかるところだけで十分だ、と。時にいわれる、古今集はまだよいが、古今集以下は読むに堪えない、と。」（加藤僖一著『良寛禅師奇話』第33話より）



良寛書「偈」良寛の里美術館蔵　善言懺悔して瞋釈けざるは、菩薩の波羅夷の罪なり。沙門良寛書

※「偈」とは、仏教的内容の詩。仏や菩薩を讃え、その教えを詠ったりしている。4字、5字、7字を一句としたものが多い。

「師が雨にあい、石地蔵が笠をつけたそばに立って雨をしのいだ。人が師であることを知り、家につれて帰り、書を書いてくれとたのんだ。師は『イロハニホヘト』の歌を十二枚の紙に大書したという。」（加藤僖一著・解良栄重筆『良寛禅師奇話』第42話より）

「新潟市の飴屋万蔵という者が、師の書を信じてその家の看板を書いてもらいたいと望んだ。紙や筆を持って、師を追いかけ、地蔵堂の宿場某の家でようやく師に逢うことができた。ねんごろにたのんで、その欲望をかなえたのである。師がこの日、人に語っていうには、私は今日わざわいにあった、とうんぬんされた。私は今年、新潟を通りかかった。その家はまだ禅師の看板を掲げていた。・・・」（『良寛禅師奇話』第43話より）

「坡丈という者があり、俳諧や和歌をよむ者である。自ら書のまずさをなげいていた。師がこれを聞いて、美しい、みにくいに心をわずらわせることはない。書は自ら成るものである。坡丈はこれより字を書くのが楽になった、と。そのともがら若水が語った。」（『良寛禅師奇話』第53話より）

「良寛上人がある日、山田の宿某の菊の花を折った。主人が見とめて、花盗人だとして、その図を絵に書き、『これに賛を書けば許そう』といった。上人は筆を取って『良寛僧が今朝の朝、花持て逃ぐるおん姿、後の世まで残らむ』と書いた。」（『良寛禅師奇話』第57話より）

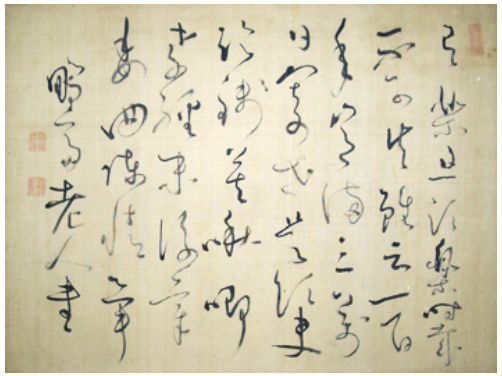
「あわ雪の中にたちたる三千大千世界またその中にあわ雪ぞ降る」

亀田鵬斎（かめだほうさい）

宝暦2年（1752）～文政9年（1826）書家・儒学者（折衷学派）

群馬県生まれ、と江戸神田生まれの説有り。6歳で三井親和（みついしんな）に書を習った。23歳で、書塾を開く。門人は千人以上。が、「寛政異学の禁」で「異学の五鬼」の一人とされ、門人のほとんどを失い、貧困のうちに酒に溺れた。50歳頃塾を閉じ、各地を放浪。文化6年（1809）越後を旅した折、良寛と出会い、大きな影響を受けたらしい。60歳で江戸に戻ると、その書が大人気となり、売れに売れたという。

亀田鵬斎肖像　谷文晁画



鵬斎書「寒山詩より」42×56㎝

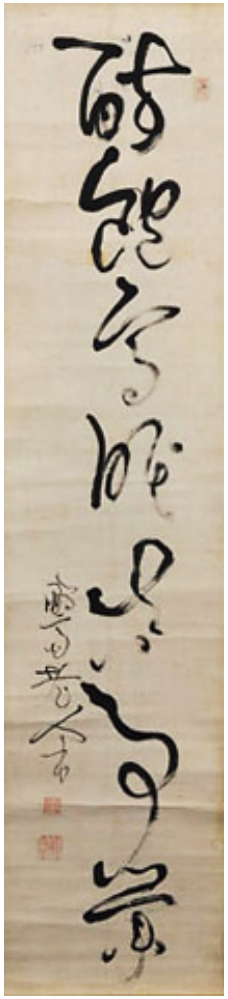
有樂且須樂。時哉
不可失。雖云一百
年。豈滿三萬
日。寄世是須臾。
論錢莫啾唧。
孝經末後章。
委曲陳情畢。
鵬斎老人書

空中を飛び回るような彼の書法は、欧米の収集家から「フライイング・ダンス」と形容される。「鵬斎は越後がえりで字がくねり」と川柳に詠まれるほど、良寛の影響が言われるが、ほんとうは懐素の影響のほうが強いようだ。

彼の草書は「鵬斎も蚯蚓流（みみず）（蚯蚓書き）」と言われる。

彼は、酒と詩を愛し北魏の楷書と懐素に似た草書を得意とした豪放磊落（ごうほうらいらく）で心優しい人柄であったという。

門人に巻菱湖（まきりょうこ）、藤田東湖（ふじたとうこ）らがいる。

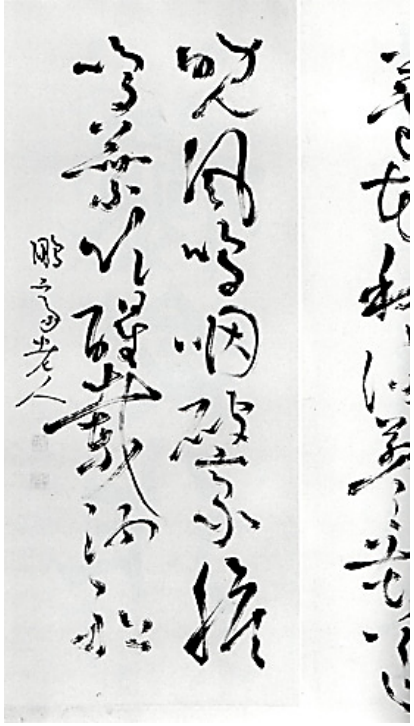


鵬斎書「蘇軾の七律より」

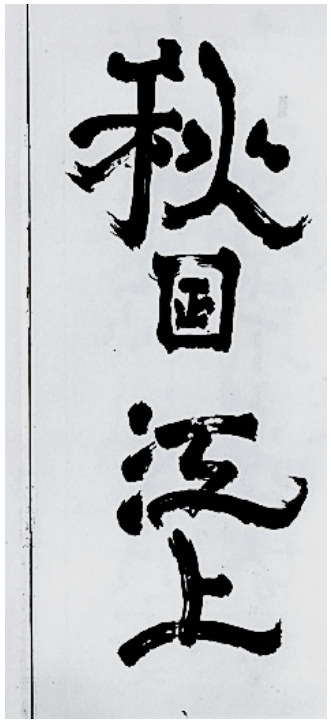
酔い飽きて
高眠するは
真の事業なり
鵬斎老人書

良寛の里美術館蔵

亀田鵬斎書「六曲一双屏風」文化6年（1809）頃



部分



「六曲一双屏風」

鵬斎が良寛に逢った頃に書かれたもの。題を隷書で書き、詩を草書で書いている。

鵬斎は、剛直で自己主張の強い書風である。

良寛から何を学んだのであろうか。書の上には表れていないようだ。張旭や懐素の酔書の影響が大きいかと思われる。

富川大塊（とみがわだいかい）　寛政11年（1799）～安政2年（1855）長岡市栃尾町で生まれた。

書画のほか諸芸万般に通じた人という。良寛と厚く交遊した。

書は細井広沢（ほそいこうたく）、董其昌（とうきしょう）、趙子昂（ちょうすごう）などを学んだという。古里の難民救済と治安に尽力したという。

上州屋大里家の看板（右２枚が良寛書、真中が富川大塊の書、左から２枚目が巻菱湖（まきりょうこ）の書、左端が亀田鵬斎の書。）

良寛が長岡の上州屋の前を通りがかった時、頼まれて「酢醤油」「上州屋」と看板の字を書いてあげた。上州屋は喜んでそれを店の障子戸に貼っておいた。

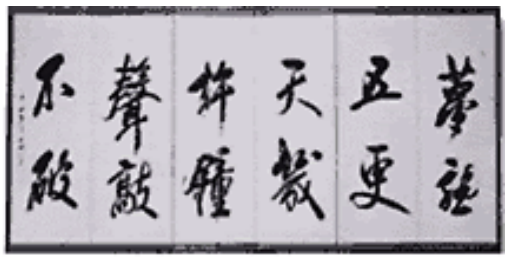
通りがかった亀田鵬斎がその字を見て「これは良寛さまの字ではないか。もったいない、私が書いてあげるから、良寛さまの書は奥にしまっておきなさい」と言って書いてやり、それを障子戸に貼らせた。

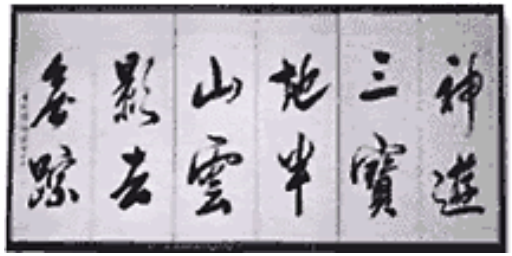
後日、巻菱湖がその鵬斎の書を見て「もったいない。私が書いてあげるから鵬斎先生の書はしまっておきなさい」と言って看板を書いてやったという。

そして、またまた通りがかった富川大塊が「これはもったいない。菱湖先生の書ではないか。俺が同じものを書いてやるから、奥へ引っ込めておきなさい」と言って「御用酢醤油」の看板を書いてやったという。

富川大塊書「**幟**（のぼり）」

50歳の時の作。長岡市滝の下町の十二山神社に献上されたもの。





富川大塊書「**六曲一双屏風**」大字行書。嘉永５年（1852）52歳の作。長岡市・栃尾美術館蔵

夢熟　夢は熟す
五更　五更の
天幾　天幾
杵鐘　杵の鐘
聲敲　声敲けども
不破　破れず
辛亥花月大塊處士
※花月（かげつ）は３月の異名

神遊　神は遊ぶ
三寶　三宝の
地半　地半
山雲　山の雲
影去　影去りて
無踪　踪（あと）無し
書於清瀧精舎大塊

富川大塊書　碑文「**南部山**」
長岡市森上（もりあげ）の南部神社にある。

南部神社は「猫又権現」とも呼ばれ、猫を信仰している。

猫の石像があることで知られているという。